

大学生の規範意識について

松 原 英 世

研究ノート

大学生の規範意識について¹⁾

松原英世

I はじめに

大学内で傘や自転車の盗難がしばしば発生する。そのような行為をする学生はどのような学生なのだろうか。そのような行為をする学生としない学生とでは、規範意識に差はあるのだろうか。差があるとすれば、その原因は何だろうか。そもそも、傘泥棒や自転車盗を含めた、各種の逸脱行為に対する規範意識はどのように分布しているのだろうか。このような問いに答えるため、われわれは、大学生を対象に規範意識に関する質問紙調査を行った。

中・高校生を対象に実施された、「少年の規範意識に関する調査・研究」では、規範意識について次のような結果が示されている²⁾

① 社会的逸脱行動(種々の犯罪・不良行為・反道徳的行為)に対する許容性を「一般群」と「非行群」の少年で比較すると、不良行為について「非行群」のほうが顕著に許容的であった。

② 社会的逸脱行動に対する実行予測(どれくらいしてしまう可能性があるか)については、「一般群」のほうが、「絶対しない自信がある」と答えている割合が高く、「一人でもしてしまうかもしれない」、さらに、「友だちに誘われればしてしまうかもしれない」と答える少年の割合は、「非行群」のほうが高かった。

③ 社会的逸脱行動をしてしまったことについての合理化(例えば、駅前に置いてある他人の自転車を断りもなく乗った場合に、「その自転車が古かったから」や、「その自転車にカギがかかっていなかったから」などとする言い訳)を容認するか否かを

比較すると、本調査で取り上げた6つの逸脱行動すべてについての合理化に対して、「非行群」のほうが容認する割合が高かった。

④ 社会的逸脱行動に対して、どのぐらい悪質意識を持っているか比較すると、「一般群」のほうがすべての行動について高い悪質意識を持っていた。

⑤ テレビや新聞等で少年事件報道に接した際の際の同調の程度を比較すると、「非行群」のほうが同調しやすいことが分かった。

以上の結果から、本研究では、「一般群」の少年と「非行群」の少年では、「一般群」のほうが規範意識が高く、「非行群」は規範意識が低いと結論づけられている。

本研究からは、規範意識が低いから非行に走ったのか、非行に走ったから規範意識が低くなったのかについては分からない。けれども、仮に「規範意識が低いから非行に走った」とするならば、「規範意識に差をもたらす要因」を解明し、その知見を活用することで（そうして規範意識を高めることで）、大学生の逸脱行動を防ぐことができるかもしれない。われわれの調査の背景には、そうした意図も含まれている。

以下に、本調査の結果を紹介し、若干の考察を加える。

Ⅱ 方 法

1. 手 続

本調査では、無記名式の調査票への記入を求める方法をとった。

調査時期は、2013年7月8日、同10日である。

2. 調査協力者

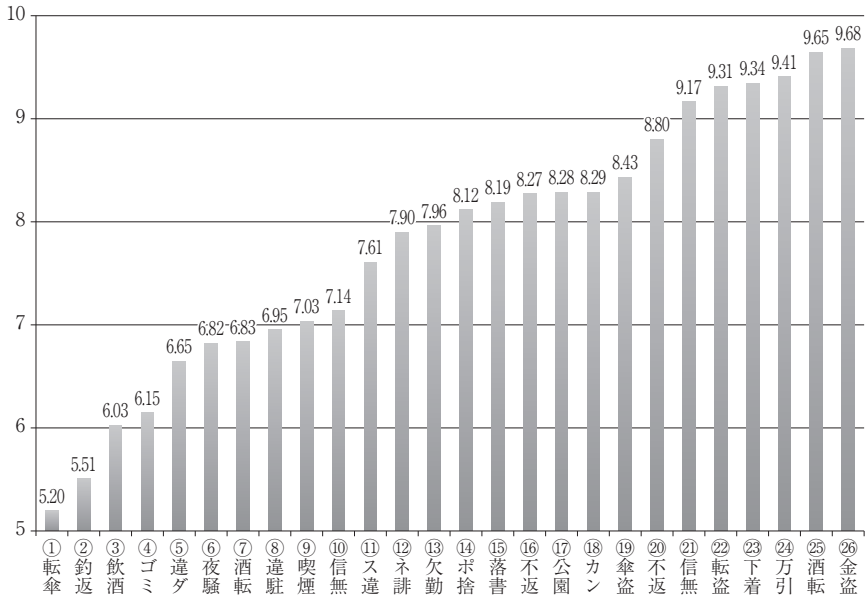
調査協力者は、愛媛県に所在する大学の学生320名である。但し、分析は、すべての項目に回答した229名分の回答を使用した。229名の男女別の内訳は、男子114名、女子115名である。平均年齢は20.27歳（SD 0.96）であった。

Ⅲ 結 果

1. 規範意識の分布

図1は、それぞれの逸脱行為について、「どの程度悪いと考えるか」を10段階で回答してもらったものである。見やすくするために、値の低いものから高いものへと並べ替えた。尋ねた逸脱行為は、順に、①自転車の傘差し運転、②お釣りを多くもらったのに返さない、③未成年の飲酒、④ゴミの無分別、⑤違法ダウンロード、⑥夜中に騒ぐ、⑦酒気帯び運転（自転車）、⑧違法駐車、⑨未成年の喫煙、⑩信号無視（人）、⑪スピード違反（自動車）、⑫ネット上での誹謗中傷、⑬アルバイトの無断欠勤、⑭ゴミのポイ捨て、⑮借りた本への落書き、⑯借りた物の不返却（友人から）、⑰公園施設への落書き、⑱カンニング、⑲傘泥棒、⑳借りた物の不返却（公共施設から）、㉑信号無視（自動車）、㉒自転車盗、㉓下着泥棒、㉔万引き、㉕酒気帯び運転（自動車）、㉖金銭盗である³⁾

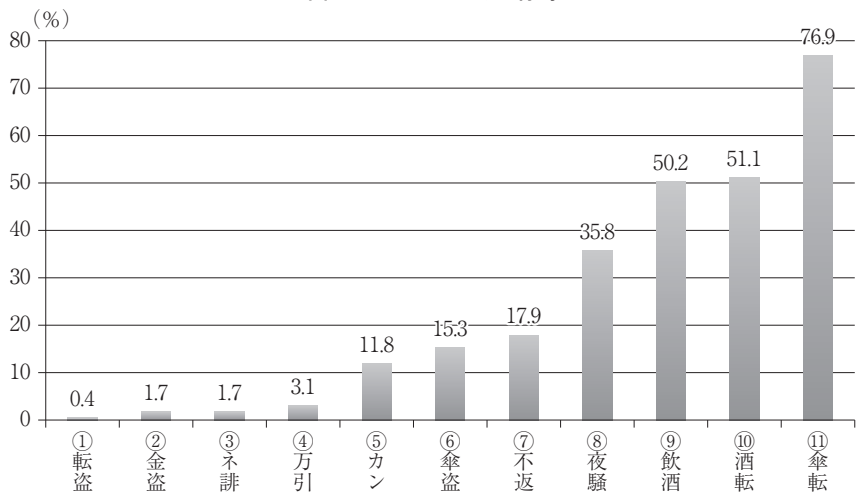
図1 規範意識の分布



2. したことがある行為

図2は、「したことがある行為」について尋ねたものである。見やすくするために、「したことがある」との回答が少なかったものから多いものへと並べ替えた。尋ねた逸脱行為は、順に、①自転車盗、②金銭盗、③ネット上での誹謗中傷、④万引き、⑤カンニング、⑥傘泥棒、⑦借りた物の不返却、⑧夜中に騒ぐ、⑨未成年の飲酒、⑩酒気帯び運転（自転車）、⑪自転車の傘差し運転である。

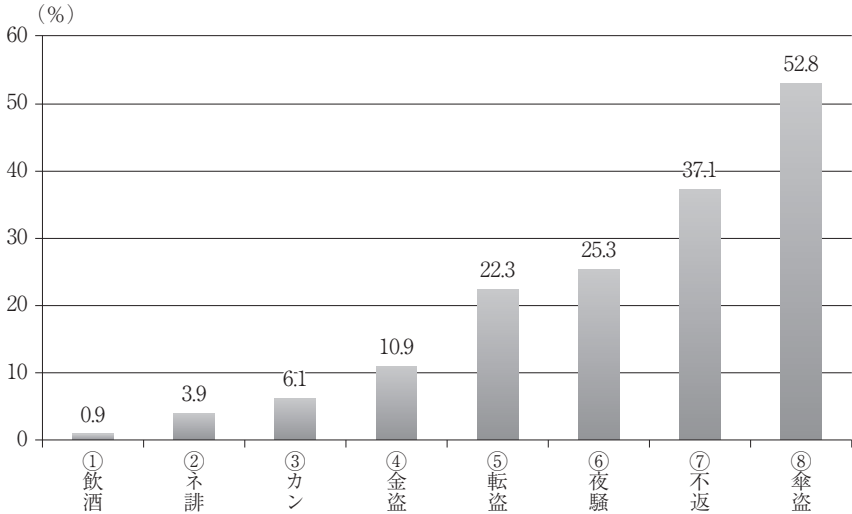
図2 したことがある行為



3. されたことがある行為

図3は、「されたことがある行為」について尋ねたものである。見やすくするために、「されたことがある」との回答が少なかったものから多いものへと並べ替えた。尋ねた逸脱行為は、順に、①未成年の飲酒、②ネット上での誹謗中傷、③カンニング、④金銭盗、⑤自転車盗、⑥夜中に騒ぐ、⑦借りた物の不返却、⑧傘泥棒である。

図3 されたことがある行為



4. 属性ごとの規範意識の差異

図1で示したそれぞれの逸脱行為について、その悪さの程度を10段階で回答してもらったものの平均値を回答者それぞれの規範意識を示す指標と仮定し、それを回答者の属性ごとに分けて検討したところ、「性別」、「一人暮らしかどうか」、「部・サークルへの所属の有無」、「アルバイト継続経験の有無」⁴⁾で、規範意識に有意な差が見られた⁵⁾。

表1、表2、表3、表4に示したとおり、女子学生のほうが男子学生よりも、自宅生のほうが一人暮らしをしている学生よりも、なんらかの部・サークルに所属している学生のほうが所属していない学生よりも、アルバイトを半年以上続けた経験のある学生のほうがそうでない学生よりも、規範意識が高いことが分かった⁶⁾。

表 1 性別での比較

	男 n=114	女 n=115
規範意識の平均値	7.50 (SD 1.26)	8.09 (SD 1.19)
$t=3.67$ $df=227$ $p<.0.1$		

表 2 居住形態での比較

	一人暮らし n=125	自宅 n=104
規範意識の平均値	7.64 (SD 1.17)	7.98 (SD 1.34)
$t=2.04$ $df=227$ $p<.0.5$		

表 3 部・サークルへの所属の有無での比較

	有り n=137	無し n=92
規範意識の平均値	7.84 (SD 1.17)	7.73 (SD 1.34)
$t=2.79$ $df=227$ $p<.0.1$		

表 4 アルバイト経験の有無での比較

	有り n=176	無し n=53
規範意識の平均値	7.81 (SD 1.22)	7.7 (SD 1.41)
$t=2.51$ $df=227$ $p<.0.5$		

IV 考 察

最後に、前章で示した結果に若干の考察を加えることで、本稿を閉じることにしたい。

1. 規範意識の分布について

図1から、逸脱行為については、行為ごとに「悪いと感じる程度」に序列があることがうかがえる。この序列のあり方から、本調査で取り上げた逸脱行為を3つのグループに分けることができるだろう。

1つ目のグループは、①自転車の傘差し運転から⑩信号無視（人）までである。これらは、学生にとって身近な逸脱行為とすることができる。とりわけ、「したことがある」という意味で、身近な行為だということができるだろう（図2参照）。なお、「規範意識」と「したことがある」との間には弱い負の相関（ -0.24 ）があることが分かった。したがって、規範意識が低い者ほど逸脱行為をしたことがある可能性が高いということである。但し、「したことがある」から規範意識（悪いと感じる程度）が低くなっているのか、これらの行為に対する規範意識が低いから「してしまった」のかについては、本調査からは分からない。この点については、さらなる調査が必要である。

2つ目のグループは、⑪スピード違反（自動車）から⑲傘泥棒までである。これらも、学生にとって身近な逸脱行為とすることができるが、これらは1つ目のグループとは異なり、「されたことがある」という意味で身近な行為とすることができるだろう（図3参照）。それゆえ、これらの行為に対しては、1つ目のグループに比べて、規範意識（悪いと感じる程度）が高くなっていると解釈することができる。

最後のグループは、⑳借りた物の不返却（公共施設から）から金銭盗までである。これらは、一般に「犯罪」と考えられる行為である。そのほとんどの値が9を超えていることから、学生にとっても、これらの行為は単なる逸脱行為ではなく、いわゆる「犯罪」として認識されていることが推測される。

2. 女子学生のほうが規範意識が高いことについて

これについては、同種の結果を示す先行研究がいくつかある。例えば、阿部(2009)は、埼玉県と神奈川県に所在する私立大学の学生（1年生）251人（男子92人、女子159人）を対象に、38の逸脱行為（逸脱行為でないものも含まれる）について、悪いと感じる程度を尋ねるという調査を実施し、その結果、女子学生のほうが男子学生よりも「悪さ」についての感受性が高いことを明らかにしている⁹⁾

また、牧亮太他（2011）は、約束意識について、女子学生のほうが男子学生よりも約束を守ろうとする意識が高いことを明らかにしている⁹⁾

では、なぜ男子学生と女子学生とで規範意識に差が生じるのだろうか。われわれは、周囲との関わりにおける男女間の違いが規範意識に影響しているのではないかと考えている。例えば、大学内で友人と一緒に行動しているのは、男子学生よりも女子

学生のほうが多いように思われる。また、女性のほうが周囲の目や、周りにいる人との関わりを強く気にしているといわれることがある。このことは、女性は特定のグループに所属したり、他人と行動をとともにしたりするなかで、安心感や自分の存在価値を見出す傾向が高いことを推測させるが、そのような他者との関係性を維持していくためには、そこに存在する規範に敏感であること（そして、それを遵守すること）が重要となるだろう。それゆえ、こうしたことが男女間での規範意識の差に影響していると考えるのである。実証的な検討については、今後の課題としたい。

3. 自宅生、部・サークルへの所属学生、アルバイト継続経験のある学生のほうが規範意識が高いことについて

これらの結果からは、なんらかの集団に所属している（日常的な準拠集団を有する）学生のほうが、そうでない学生よりも規範意識が高いことが予想される。この結果は、経験的にもうなずけるし、社会統制理論とも親和的であろう。それゆえ、学生に何らかの集団に所属させることで、規範意識を高めることができるかもしれない¹⁰⁾

大学生の規範意識という観点から最も興味深いのは、「一人暮らしかどうか」で規範意識に差が見られることである。性別も含めて、それ以外の要因については、大学生となることでその属性が変化するものではない¹¹⁾また、「一人暮らしかどうか」については、経験的に、因果の方向は「一人暮らしかどうか」→「規範意識」だと考えられる。それゆえ、「一人暮らしをする」ことは、大学生となることで規範意識を下げる主要な要因として注目することができる。

では、なぜ一人暮らしをすることで規範意識が下がるのだろうか¹²⁾すなわち、一人暮らしをすることのどのような要素（例えば、一人で暮らすことそれ自体なのか、家族のもとを離れることなのか、あるいは、これまで育った環境から離れることなのか）が、規範意識に影響を与えているのだろうか。このメカニズムを解明することは今後の課題であるが、そうすることで、規範に関する一般理論に大きな貢献ができるのではないかと考えている。

注

- 1) 本稿は、愛媛大学法文学部総合政策学科におけるゼミ活動の成果であり、ゼミの所属学生である、桑野茜、西川真愛理、藤井美心、藤田理香、前澤唯、宮本奈都美、八木美樹が

まとめたゼミ論文に、筆者が補筆・修正を行ったものである。したがって、便宜上、筆者が執筆者となっているが、実質的には彼女たちの論文であることを断っておきたい。不十分な論考ではあるが、教育的配慮からこのようなかたちで公表することをご海容いただければ幸いである。

- 2) 規範意識調査研究会「少年の規範意識に関する調査・研究」日工組社会安全研究財団調査報告書(1999)参照。
- 3) 学生の日常生活における規範意識を探るため、ここでは、学生の身の回りで実際によく起こっていそうな(また、やったことがありそうな)行為を選んでいる。なお、殺人のように、回答者のほとんどが「最も悪い(10)」と回答しそうなものは除外している(もちろん、このような行為は学生にとって身近なものでもない)。
- 4) 「アルバイト継続経験」は、アルバイトを半年以上続けた経験があるかどうかを尋ねている。
- 5) 多変量解析を用いることで、より興味深い結果が示せるかもしれないが、これらについては今後の課題としたい。
- 6) 他に規範意識に影響を与えることが予想される要因として、「兄弟姉妹の有無」、「自動車免許を所有しているかどうか」、「権威主義的傾向」、「親への愛着の程度」を尋ねたが、これらについては有意な差が見られなかった。なお、「権威主義的傾向」と「親への愛着の程度」については、調査実施上の制約から質問項目を極端に減らしたことによるものと思われるが、そもそも尺度を構成することができなかった。
- 7) ここで示した相関係数は、回答の分布(図2参照)を考慮して、回答の割合が極端に高かったもの(①自転車の傘差し運転)と低かったもの(①自転車盗、②金銭盗、③ネット上での誹謗中傷、④万引き)を除外し、その他の行為(⑤カンニング、⑥傘泥棒、⑦借りた物の不返却、⑧夜中に騒ぐ、⑨未成年の飲酒、⑩酒気帯び運転(自転車))について「したことがある」と答えたものをそれぞれ1点として足し併せたもの(0~6点)と「規範意識」(平均値)の値を用いて算出したものである。
- 8) 阿部洋子「現代日本の青年期の男女における善悪に関する意識構造と道徳領域判断(1)「悪さ」について」跡見学園女子大学文学部紀要42巻2号(2009)73-86頁参照。
- 9) 牧亮太・宮木景子・湯澤正通「大学生の約束意識と規範的態度」広島大学心理学研究10号(2011)81-88頁参照。
なお、山岸明子「現代小学生の約束概念の発達：22年前との比較」教育心理学研究54号(2007)141-150頁、山岸明子「現代小学生の約束概念の発達：状況の考慮をめぐって」社会心理学研究22号(2007)285-294頁では、小学生の約束意識に関する研究において、小学生の段階では規範の捉え方に男女差が見られないことから、その差が生じるのは中学生以降であることが示唆されている。
- 10) 但し、「部・サークルへの所属」、「アルバイト継続経験」に関して、そこに属しているから「規範意識」が高いのか、あるいは、「規範意識」が高いからそこに属していることができるのかについては、本調査からは分からないことに留意する必要がある。

- 11) もちろん、大学生になってはじめて、部・サークルに所属したり、アルバイトを始めた学生もいるかもしれないが、その割合は低いと思われるので、これについてはここでは取り上げない。また、もちろん、大学に入る前から一人暮らしをしていた学生もいるかもしれないが、同様の理由から、これについてもここでは取り上げない。
- 12) ここで注意を要するのは、逸脱行為をしやすくなることと、規範意識が低下することとは分けて考える必要があるということである。すなわち、一人暮らしをすることで、家族等の監視が無くなり逸脱行為をしやすくなることと、ある種の行為に対する規範意識が変化することとは独立の事象として考えることができるということである。